



いざカンボジアへ

カンガス神父とともに

一昨年の秋、山口教会のカンガス神父とヨーロッパ巡礼に行く予定だったが、直前に肺炎になり、キャンセル料が五万円。病院のベ

ッドで旅を想像することとなった。

ヨーロッパ旅行よりもカンガス神父と一緒に旅ができなかったことが悔やまれた。

そもそも私の洗礼、その後の信仰生活は外国人宣教師によるところが大きい。生まれ故郷を離れ、家族とも離れて生涯を異国で神への奉仕に生きる外国人宣教師に強い畏敬の念を持っているからである。

この巡礼記も外国人宣教師とのフランス、スペイン、ポルトガルへの旅から始まったもの。



ポルト時代、二百万人が殺されたという

のだ。

スペイン人のカンガス神父は来日して五十二年、今年、八十三歳になられた。いつも笑顔で、父である神を実感させる神父である。

周囲への気配りもよくされ、今回、カンガス神父が支援活動をして

「黄金の日々」にフロイス役で出演された。イグナチオ教会に三十二年、その後、広島

の祇園教会に九年、そして一昨年から山口教会で働いておられる。

イグナチオ教会ではフィリピンの人々という所にあるハンセン病患者の支援活動をし、祇園教会に赴任されてからはカンボジア復興支援活動を二〇〇一年から始められた。

今回の旅は支援しているカンボジア各地を訪問するのである。私にとつてカンボジアは全く未知の国。訪れることを知った長女リカから「カンボジア最新線」(熊岡路矢著・岩波新書)が送られてきた。

熊岡氏はJVC(日本国際ボランティアセンター)のカンボジア代表として三年間、現地で働かれ、JVCのパレスチナ担当をしている娘とも親しいらしい。

読むと、カンボジア

に激動をもたらしたのは、わずか五十年前からである。貧しい農業国がアメリカのベトナム戦争に巻き込まれ、一九七五年からはポルト政権下で二百万人以上の国民が殺されたという。

今回の参加者は全員

で十七人。カンガス神父が毎年訪れるのは支援のためだけののだろうか？ダンボール箱二十個の支援物資とともに広島空港を出発したのは七月二十日朝である。

(元山口放送取締役ラジオ局長)



笑顔のカンガス神父



山のような支援物資